

# 英語“as”の多義の構造：接続詞の意味

河原清志\*

## The Structure of the English Polysemous Word “As”: Its Use as a Conjunction

Kiyoshi Kawahara

**要 旨** 本稿は英語“as”の多義性について接続詞に限定して統一的な説明を試みるものである。「as」は潜在的意味として、＜現実には生起している（した）出来事＞（後景情報）を主節とゆるい等価で結ぶ函数関係を示す」という意味を有し、スーパー・スキーマ(コア)が潜勢態としてあり、2つのパラメーターの状況的關係の力学（as節と主節がそれぞれ指標する出来事の内容と指標野における位相關係）の中で語義が確定するという理論構成が可能である。具体的には「接続詞」の用法として、(1)〔時〕は「同時性」を基本とし、(a)瞬間的時間の場合は「偶発性」、(b)多少の時間の幅がある場合は「同時進行性」、(c)かなりの時間の幅がある場合は「連動性（比例性）」が前景化し、動的な出来事どうしが「等価」で結ばれる。(2)〔理由〕は「状態性」が特徴で、後景の状況・事情を表すas節は静的な出来事として主節と「等価」で結ばれる。その他、(3)〔様態〕、(4)〔逆接〕、(5)〔比較〕、(6)〔局面〕といった語義も「等価」から導かれることが観察され、多義現象に対して語義の連続性のある説明が可能であることが確認された。

キーワード 等価 コア 語義の連続性

### 1. はじめに

本稿は、不可視で不可触、そして多面性をもつことばの意味について、語という小さい単位に多次元から切り込んで分析するものである。その試みとして、一般に多義が認められるとされる英語“as”を分析対象に取り上げてその意味構造を解明し、統一した語の意味説明の枠組みを提示したい。

これまでasの意味・用法・語法などの本格的な理論研究は他の語に比べると少ない。日本におけるものだと、福村（1985）、山中（1985, 1986）、莊口（1993）、田中（彰）（1997, 2001）、古賀（1998, 1999）が、asの数多くあるとされる語義のうち、2つの語義を取り上げて議論しているのみであり、asの意味全体にわたる議論はまだなされていないのが現状である。そこで本稿では、意味説明において分断されている語義間の連続性の回復をし、統一的な説明を行う試みをしたい。但し、本稿は「接続詞」に限定して論ずることとする。

\* 本学非常勤講師 認知言語学・通訳翻訳学

## 2. 多義語をめぐる学説

一般に、多義語の多義性をめぐる学説には、主に「単義説」と「多義説」があり、これはプロトタイプ現象を扱った研究から展開した学説を見てゆけば流れがつかめる。代表的なものとしては、レイコフの over の多義性の研究がある (Lakoff, 1987, pp. 416-461)。ここで、プロトタイプという用語をめぐって、プロトタイプを典型事例 (typical token) と解する範列モデルと、典型例を基盤に形成される概念 (proto-type) を表すと解する、いわば概念モデルがある (吉村, 2002, p. 225)。概念モデルでは、典型例の持つ特徴の概念的要約、ないしはスキーマ的表象を中心に考えるので、その点でプロトタイプ論を概念形成論の1つと見るモデルになる。こうした事情から、範列モデルでプロトタイプと言え、典型例とほぼ同義になるが、概念モデルでは、典型例とプロトタイプとを区別する研究者もいる (深谷・田中 (茂), 1996)。概念モデルは、Langacker (1987) のスーパー・スキーマや、コア理論 (田中 (茂), 1987, 1990)、意味の核 (飛田, 1998)、現象素 (国広, 1997)、中核的意味 (小西, 1980) などが該当し、これがいわゆる「単義説」に相当すると考えられる。

他方、レイコフを中心とした範列モデルを採用のものとして、Brugman (1981)、Lakoff (1987)、Taylor (1989)、瀬戸の中心義 (2007b) などがあるが、これらは一つのプロトタイプを中心に語義間の関係を図式の連鎖図で表すことから「複数図式論 (Lexical Network Model)」と呼ばれている (田中 (茂), 1997, p. 66)。これは語義の関係が放射状構造 (radial structure) をなしており、理想認知モデルでレイコフ (1987, p. 68) が示している4つの構成原理 (命題構造、メタファー、メトニミー、シネクドキー) によって放射状に語義が展開するとする仮説である。では、次節で具体的な接続詞の語義を順に検討し、上記の学説のどちらに依拠するのがより説明力があるか検証したい。

## 3. 接続詞 “as” の語義の分析

まず、“as”の語義を接続詞に限定して取り上げてみたい。

- (1) 接続詞の語義：①〔時〕…と同時に、…の時、…しながら、…につれて、②〔理由〕…なので、…だから、③〔様態〕…のように、④〔逆接〕…であるが、…とはいえ、⑤〔比較〕…と同じように、⑥〔局面〕…するところでは、…する限りでは

以上のリストは英和・英英辞典 (巻末掲載の参照辞典) から導き出したものであるが、さしあたりこの分類に沿って接続詞の語義を検討してみたい。

- ①〔時〕…と同時に、…の時、…しながら、…につれて：

古賀 (1998, 1999) の指摘のように、時を表す as の意味特性を「同時性」と捉え、その本質を主節と従節が表す事象の時間の <同時進行> と考えて議論を進めたい。ここで、「同時性」に

関して、古賀（1998, 1999）は（1）時間の広がりを持った事象どうしの同時性と、（2）瞬間的な出来事の同時性、の2つにおいて「同時性」が認められるとしているが、「比例」の用法とこれとに連続性があることが指摘できる。つまり、「比例」の用法（継続的な出来事）を「時」の用法と別項目として立てている辞典もある（『岩波大英和』、『ジーニアス』）ことからわかるように、この同時性は、asによって結合される主節と従節の出来事どうしの「同時的共起」が本質であり、時間の幅（（ア）瞬間、（イ）多少の時間の幅、（ウ）かなりの時間の幅）によって、主節と従節の出来事どうしの共起性にグラデーションが見られる。例えば、（ア）瞬間的な出来事どうしであれば、

- (2) a. The telephone rang (just) as I was going into the bathroom.  
b. The telephone rang (just) when I was going into the bathroom.

のように、whenと比べると、主節と従節の出来事どうしの「同時性」が本質であるasは＜偶然性＞を表す傾向があり、(2a)は[トイレに入ろうとしていた]—(偶然それと同時に)→[電話がなった]という出来事間の共起関係がある(justがつくと、「まさにちょうどその時に」という意味合い)。逆に、whenは時間の流れとして[従節の出来事の生起]→[主節の出来事の生起]、という継続読みの選択肢も同時性と併せ持つという性質に鑑みると、偶然性よりも生起順が加味された意味合いがあり、(2b)は[トイレに入ろうとしていた]—(そしてその時)→[電話がなった]という出来事間の時間的流れがある(justがつくと、「よりによってその時に」といった迷惑な気持ちを暗示することもある)。

次に、(イ)多少の時間の幅のある出来事どうしはどうか。

- (3) a. As I entered the room, applause broke out.  
b. When I entered the room, applause broke out.

部屋に入る行為は多少の時間の幅のある出来事である。asの場合は主節の出来事との「同時的共起」が認められるので、「入っていくと同時に」という意味合いだが、whenの場合は継続読みの可能性が前景化し、「入る行為が完了した後に」という意味合いになる。

では、(ウ)かなりの時間の幅のある出来事どうしはどうか。

- (4) a. As he grew older, he became more silent.  
?b. When he grew older, he became more silent. (「?」は適格性の容認度が低いことを表す。)

これは「比例」に該当し、彼の成長と寡黙な性質の増大とが比例的に展開している。つまり、as節の出来事は主節の出来事と連動的に共起していることがわかる。ところがwhen節だと継続読みの可能性が前景化し、[大きくなった]—(そしてその時)—[以前より寡黙になった]という

意味合いとなり、同時共起性は認めにくい。

以上のことから、類型論上、「時間」という意味領域の中で、as は「前・同時・後・反復・近接性・継続期間・期間の一時点・時点・頻度」という下位領域のなかで「同時」という意味合いを持つと考えられ、その特質は「同時共起性」であることがわかった。そして時間の幅に応じて、(ア) 瞬間的同時性であれば偶発性を、(イ) 多少の時間の幅の同時性であれば同時進行性を、(ウ) かなりの時間の幅の同時性であれば連動性(比例性)をそれぞれの意味特性とする。これらは、プロトタイプないし中心義である「同程度」の語義から「程度」の問題として「時」を説明するよりも、潜在的意味(meaning potential)としてのコアである「等価」を函数とし、2つのパラメーターに2つの出来事を代入すると、出来事の時間の幅の違いに応じて、それぞれ、偶発性(バラバラな出来事どうしを同じ一点の時間と見なして等価的に結ぶ)、同時進行性(ある出来事が起きている間、別の出来事が同時に進行しているを見なして等価的に結ぶ)、連動性(ある出来事が別の出来事と連動して比例的に状況が展開すると見なして等価的に結ぶ)といった意味性が顕在化する、と考えるほうが説明的であろう。これらが時および比例の意味領域における as の具体的特性である。

②〔理由〕…なので、…だから：

これは because と since との違い、そして as の「時」その他の語義との連続性、がポイントとなる。まずは、他の辞典にも趣旨は書いてあるが、『E ゲイト』の箇所を見てみよう。

because : 「…だから」という意味で、理由・原因を表す。述べた内容の正当化を行う、という流れの中で使われるため、後置される傾向が強い。

since : 「…なので、…だから」の意味。前置と後置の両方が可能。前置だと理由を先に述べ、後置だと理由を付け加えるはたらきになる。

as : 「…なので」の意味。文頭に置かれることが多く、付加的な理由を述べる際に用いられる。ただし「…につれ」「…のように」「…のとき」の意味で使われることのほうが多い。

ここでの指摘は、理由の文中またはテキスト内での機能の違い、そしてそれと連関する形での理由節の文中での位置、の2つがある。この点、従来、理由性の強弱で論じられることがあった。今井・中島(1983, pp. 445-446)によると、

- (5) because が最も直接的に、はっきりと理由/原因の節であることを示す。コンマを取らずに後位に現れるのが普通であるが、前位も可能である。コンマを伴って後位に現れている時には、主節の述部の原因や理由を述べているというよりも、話者が主節を陳述した理由について述べていると解釈される場合がある。

since は、because よりも間接的に理由/原因を示す。推論の根拠として自明な内容に言及することが多い。前位に現れるのが通例であるが、コンマを伴って後位に現れる場

合もある。

as は、理由／原因を示す語の中で最も弱い表現である。前位に現れるのが通例であるが、コンマを伴って後位に現れることもある。コンマを伴わずに後位に現れると「時」の意味か「態様」の意味としてのみ解釈される。

とあり、通常の（学校）英文法の本に記されているように、because>since>as などという説明はこのことから来ているのかもしれないが、より緻密な議論をするには、主節の出来事と従節の出来事の間を詳しく見る必要がある。ところが、これを説明するには、テキスト機能論との連関が強くなり、意味論では解決できない部分もある。以下、関係する辞典の記述を引用してみよう。

- (6) as と since は旧情報を担うので通例 as 節と since 節は主節の前に現れる。ただし as や since の前に especially, particularly など置いて特別の理由を示すときは主節の後にくる。[中略] 通例, because 節は新情報を担い主節の内容よりも理由の方に重点が置かれるが, as 節と since 節はすでにわかっている理由 (旧情報) を表し主節の内容の方に重点がある (『ジーニアス』, 同趣旨『ウィズダム』)。
- (7) 2つの事態の生起から一方を他方の原因・理由と見る [中略] 2つの事態の一方が「地」(背景) をなし, 他方が「図」(前景) をなすとき, as は「地」を導いて「図」の背景を描く。このとき, 「地」と「図」の連続性または同時性により, 「地」が「図」の理由と解釈される。「理由の as」は, As it was getting late, I turned to go home. の例のように, しばしば「時の as」と重なり, 理由の意味は because ほど強くない (『多義ネットワーク』)。

これらをまとめてみると、理由の as 節は旧情報を担い、理由性を前景化して明示化する意味機能が弱く、したがって、旧情報が好む前位に位置されやすい。そこで、新情報である主節が情報として重点があり、as 節 = 「地」、主節 = 「図」となる、と言えよう。

さらに、as の「理由」以外の語義との連続性であるが、たとえば、As it was getting late, I turned to go home. の例で、「理由の as」はしばしば「時の as」と重なる。ここで大切なポイントは、時を表す as 節が状態 (state) を取ることができない点である。もし状態を表すときは、理由の意味が前景化する。これは、古賀 (1999, p. 105) が指摘しているように、時を表す場合 as 節は動的で進行的な性格を帯有しているため、ある状態の存在のみを (その開始点・終了点の存在は一応無視して) 表す状態 (state) は時を表す出来事性からは排除される。したがって、動的性格が認められる出来事は時を、静的性格が認められる出来事は理由を表す、と考えてよいだろう。以上からすると、as を函数的に見ると、パラメーターに代入されるべき出来事が静的か動的か、瞬間的か継続的か、出来事どうしに同時性があるか否かで as の意味合いも変わることがわかる。理由の場合は、静的な出来事どうしがゆるい「等価」で結ばれている、と考えることができよう。

ではそのことを受けて、「原因／理由」という概念領域の意味性についてももう少し深く掘り下

げてみたい。この概念領域の下位領域としては、(i) 原因 - 結果 (固有の客観的関係の知覚), (ii) 理由 - 結果 (話し手による関係の推論), (iii) 動機づけ - 結果 (その後の結果を伴う人間の意志), (iv) 状況 - 結果 (理由と、満たされると思われている、もしくは満たされることになっている状況の結合) があるが (グリーンバウム・クワーク, 1995, pp. 574-575), as 節ではどの可能性があるだろうか。他の接続詞との対比で考えてみよう (以下 (8) はグリーンバウム・クワーク, *ibid.*, pp. 574-575 から引用)。

- (8) a. He's thin because he hasn't eaten enough.  
 b. She watered the flowers because they were dry.  
 c. You'll help me because you're my friend.  
 d. Since the weather has improved, the game will be held as planned.
- (9) ?a. He's thin as he hasn't eaten enough.  
 b. She watered the flowers as they were dry.  
 c. You'll help me as you're my friend.  
 d. As the weather has improved, the game will be held as planned.

上述の下位領域において、(i) から (iv) になるに連れて、強い因果性から状況どうしのゆるやかな結合へと、主節・従節間の関係性が弱くなっていることが認められる ((9a) は容認性が低いだろう)。先ほど、時の as 節との対比において理由の as 節の特徴として静的な出来事どうしがゆるい「等価」で結ばれている点を指摘したが、明確に理由を表す as 節であっても、このくゆるい等価で結ばれている > という点においては共通している。つまり、as 節が理由の意味合いを前景化する場合、出来事どうしに明確な因果関係があるわけではなく、as によって並置的に結合されることで、ゆるい有因的な意味合いが出てくるものと思われる。

### ③〔様態〕…のように：

行動や動作の仕方 / 様態 (manner) を表す副詞節は, as, as if, as though によって導かれる (今井・中島, 1983, p. 442)。ここでの論点は、as 節の出来事が生起する空間がオリゴ (言語の指標に関わる <いま・ここ> の基点) を中心にした指標野においてどのくらいオリゴから近接しているかによって、表現形式と統語上の振舞い方に差があり、それに伴って as の意味性も若干差が生じることである。これは、as, as if, as though の使用原理に関するものである。いずれも、ある出来事 (主節の事象) が別の出来事 (従節の事象) のあり様と類似していることを、等価性を示す as で結合するものであるが、理由の as でも記したとおり、as 節では <現実に生起している出来事性 > という特性があるため、現実生起性のないオリゴから離れた仮想・反実・抽象空間を表すものを従節にする場合には、その程度に応じて、though や if を随伴させたり、仮定法を使用したりして主節と結合させるのである。例えば、(10) (11) では現実に生起している出来事を as 節で表し、それを主節と結合させることで出来事どうしが等価的に結ばれ、結果とし

て出来事のあり様が類似したものであることが表象される。(12) では, as 節が現実起こった, ないし, 起こっている出来事を表しているものではないので, 比喩的な表現である (主節が過去時制のところ, as 節が現在時制を取っている)。(13) (14) と比較してみよう。これは, as 節の中で, 現在形が用いられると, 内容が真であるとも偽であるとも前提にせず述べていることになり (つまり開放条件相当になり), 一方, 過去形が用いられると, 偽であることを前提にして述べていることになる (つまり却下条件相当になる) (今井・中島, 1983, pp. 442-443)。例えば, (15) だと, 彼が実際には地主ではないのだがあたかも地主であるかのようにしているときは (15b), 事実関係はともかくとして, 振舞が地主然としている時には (15a) がそれぞれ対応する, と今井・中島は結論づけている。このことから考えると, (i) [as + 現在形] は信念体系 (世界観, 宇宙観)・文化的知識を表象する象徴空間を, (ii) [as if/though + 現在形] はある種の抽象的な仮想的象徴空間を, (iii) [as if/though + 過去形] はある種の反実的象徴空間を指標しており, オリゴという今ここの現実空間からは距離があるが ((iii) (ii) (i) となるに従って象徴性が大きく, オリゴから遠くなる), それを as で主節と等価的に結ぶことによって類像性 (等価に看做するという操作性) が生じ, 比喩的表現となると言えよう。

(10) Do as I say, not as I do!

(11) Let's go on as we are.

(12) They hunted him as a tiger stalks his prey.

(13) It's not as though the world is going to end if she leaves.

(14) He walks as if he is drunk.

(15) a. He behaves as if he owns the place.

b. He behaves as if he owned the place. (今井・中島, 1983, p. 443 から引用)

以上から, as によって等価的に結ばれる出来事と出来事の関係は, 主節がオリゴ付近での出来事を指標し, 従節がオリゴ付近のものから, 遠くの象徴空間のものまで指標する。そして, 従節のオリゴとの距離感に従って統語的振る舞い方も差が生じる, ということが観察された。パラメーターどうしの出来事の空間が近い場合は as は等価のうち「等しい」, つまり類似性がそのまま表象され, パラメーターどうしの出来事の空間が遠い場合は as は等価のうち「価 (価値)」, つまり等しい価値のものとして <看做す> という看做し操作性が前景化される, という函数関係が認められる。

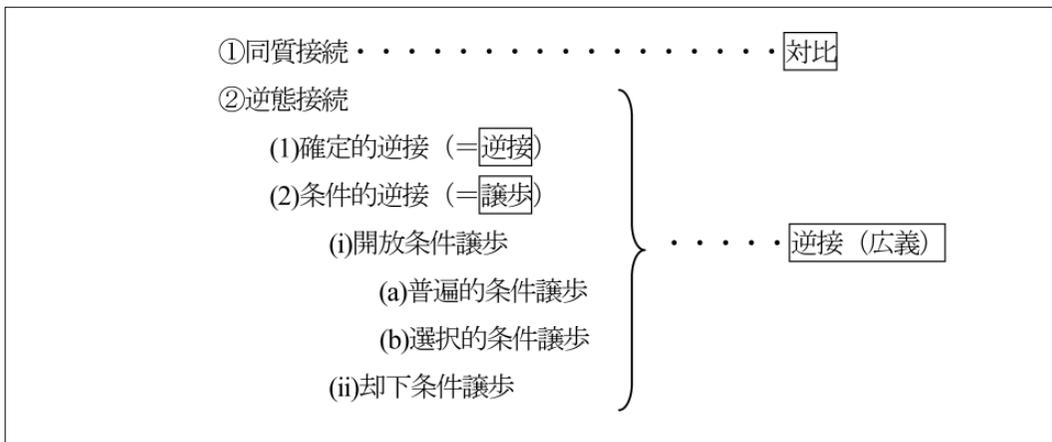
④〔逆接〕…であるが, …とはいえ:

この語義に関しては, ほとんどの辞典が「讓歩」という言葉を当てている (「逆説的理由」もある)。そこでまずは (as に特化せず) 一般的な概念領域の用語法として, この「逆接」という言葉を, 「讓歩」と共に問い直す必要がある。

「讓歩」という用語は, 「相手に歩みを讓る」が本来の語義であるが, 「主張強化」という談話

機能を担ったものである。これは、「条件」や「逆接」といった結合関係の「論理」ではなくむしろ「論法」に重きが置かれており、論理の問題としては不明瞭な印象を受ける。そこで、以下では、次の分類を今井・中島（1983, pp. 437-442）、グリーンバウム・クワーク（1995, pp. 569-573）、田中（茂）・佐藤（2001, pp. 126-127）を基に措定する。まず、対比・対照には本来、①同質接続（同質の内容の対比）と②逆態接続（一方の内容からすると他方の内容が意外であったり驚きであったりするような対比）があるが、本稿では①同質接続を専ら「対比」と呼んで1つの概念領域にする（この中の同等比較に関しては、「比較」の語義を参照）。そして、②逆態接続には（1）確定的逆接（過去・現在の確定した内容の対比）と（2）条件的逆接（未来とか非現実の内容の対比）があり、この（1）確定的逆接を（狭義の）「逆接」と呼び、（2）条件的逆接を「譲歩」と呼ぶことにする。この（2）条件的逆接には、（i）開放条件譲歩（その内容が実現するとも実現しないと判断しかねる場合）と、（ii）却下条件譲歩（事実と反する内容、起こりそうにない内容についての場合）がある。さらにこの（i）開放条件譲歩には、（a）普遍的条件譲歩（どのように満たされてもかまわない条件）と、（b）選択的条件譲歩（満たされても満たされなくてもかまわない条件）とがある。そして、（1）確定的逆接＝（狭義の）「逆接」と、（2）条件的逆接＝「譲歩」を包含して、広義の「逆接」と呼び、譲歩に相当する一つ概念領域を構成するものとする。ここで、錯綜する概念を表1で整理してみよう。

表 1. 対比・対照と逆説・譲歩の関係



では、これを踏まえて as 節に関する分析をしてみよう。まず、①「対比」（同質接続）から見てみよう。これは同質のもの対比、例えば、(16) だど対立と交渉、(17) だどビールと酒、という対比であって、(18) のように性質の異なるものどうしの対比はできない。

(16) Men often use confrontation as women often use negotiation.

(17) Just as British people enjoy their beer, so the Japanese enjoy their sake.

\* (18) This country is as wide as that man is nervous. (「\*」は適格性の容認度がないことを表す。)

対比するにあたり、程度が等価であることを示すには、副詞 *as* を形容詞・副詞に前置させ、形容詞・副詞を対比していることを示す。その際、(20) のように肯否が逆でもかまわないし、(21) のように形容詞が反意語どうしてもよい。(22) は全く異なったものどうしをコミカルに対比させている。

- (19) She is as nice as she is beautiful.
- (20) I am as happy here as I was unhappy in that company.
- (21) The woman is as diligent as the man is lazy.
- (22) His voice is as thin as he is fat.

これらは「比較」を表す *as* 節とかなり近似している。統語上の違いとしては、副詞 *as* があるとかやはり「比較」と近似するし、多くの辞書ではこれらの用例は「比較」の項目に掲載されている。一般的には、結合子 *as* は<ゆるい等価で結ぶ>ことをその函数関係の特性とし、*as* 節は<現実に生起している出来事>を後景として表現することが多く、主節情報を *as* 節との対比によって鮮明に描く機能が認められる。このことは「比較」の用例と連続している。そして、*as* によって並置されている出来事と出来事が内容的に同質であれば対比、対立関係であれば(広義の)逆接、何らかの状況-結果関係が認められれば理由、の意味合いが前景化する、という函数のパラメーターどうしの力学が背後に働いている。

次に、②広義の「逆接」を見てみよう。まず、(1)「逆接」(確定的逆接)は過去・現在の確定した内容の対比であるから、*as* 節は<現実に生起している出来事>であり、それと対立する内容、逆接的な内容が主節の出来事として語られる。

- (23) As angry as she was, the little girl's mother cracked a smile.
- (24) "As powerful as market incentives are, we often need to complement them with government action and philanthropy and special incentives to make sure the benefits are very widespread," he added.
- (25) Smart student as he was, even he couldn't get into Harvard.
- (26) As tired as she was, sleep did not come to the frightened girl.

ここで、*as* はその節内で、名詞・形容詞・副詞・動詞の原形の後に用いられる。これは石橋ほか(1984, pp. 855-856)によると、例えば、Young as he was, he was looked up to as a leader. の場合、元来、Being as young as he was, ... の前部省略の語法と考えられ(*as* を *though* にした場合は、*Though he was young*, ... の倒置形)、この構文は13-18世紀ごろまでよく用いられていて、その後、副詞の *so* [*as*] が脱落し、現代の用法になったという(アメリカ英語では、*as* ... *as* の形を取ることもあるが、これはその名残である。例として(23)(24)(26))。そして、逆接の意味はもう一方の節、つまり主節との対比によって生まれるが、これは上述の通りである。

また、『E ゲイト』は、名詞の前の冠詞は省略される、としているが（その例は (25)）、これは前置詞の「役割・機能」の用例でもそうだが、as によって対比しようとする情報を強調すると、冠詞を伴った具体的な個物としての名詞よりも、無冠詞で表される抽象的な観念としての名詞を前景化させて表現しようとするからであろう。いずれにしても、無冠詞によって対比を鮮明にさせる効果は認められよう。

今度は、② (2)「譲歩」(条件的逆接)であるが、譲歩節のバリエーションにおける as 節の可能性を考えてみよう。まず、(i) 開放条件譲歩（その内容が実現するとも実現しないとも判断し兼ねる場合）は現実を満たされうる出来事を内容とするが、それが実現するとも実現しないとも判断し兼ねることを表す。その中に (a) (b) の2つがあって、(a) 普遍的条件譲歩（どのように満たされてもかまわない条件）は一般に、任意の数の条件の中から自由に選択してよいことを示し、-ever と結合する wh- 語によって導かれるため、as 節は取らない。また、(b) 選択的条件譲歩（満たされても満たされなくてもかまわない条件）は典型的には whether ... or 形式であるが、as 節においても節内の内容が満たされようと満たされまいと、つまり、as 節が指標する出来事が生起しようとしまいと、という条件譲歩を選択的に表すものである ((27))。次に、(ii) 却下条件譲歩（事実と反する内容、起こりそうにない内容についての場合）は反実的な内容を内容とするが、それが満たされなくても、つまり、たとえ as 節が指標する出来事が生起しなくても、という却下条件による譲歩を表すものであるが、やはり as 節の〈現実に生起している出来事〉という特性に鑑みると、反実的な内容は as 節には取りにくいだろう ((28) は容認性はかなり低いと思われる)。

(27) Strange as it may seem, there was nobody in the room.

?? (28) Change your mind as you should [were to], you would not be supported by many.

(「??」は適格性の容認度が極めて低いことを表す。)

以上より、結合子 as によって並置される2つの出来事は、同質であれば「対比」、対立的であれば（広義の）「逆接」の論理関係が成り立つ。基本的に as 節は〈現実に生起している出来事〉を指標し、主節に対して後景情報となるが、as 節内で形容詞・（無冠詞の）名詞（句）・副詞などが as に前置される（広義の）「逆接」の場合は、「対比」を示す as 節とは統語論上性質を異にし、主節との対照性が前景化され、〈対立性〉が意識されやすい（「理由」を表す場合もあるが、これはパラメーターどうしの関係で函数的に定まる）。そして、as 節は〈現実に生起している出来事〉を指標することを特徴とするため、条件的逆接（譲歩）は成立場面が限定的であることも示唆された。

#### ⑤〔比較〕…と同じように：

比較構文においては、主節命題が従節命題と比較される。大きく見ると、比較には等価 (as ... as が典型) / 非等価 (比較級が典型)、充足 (enough が典型) / 過多 (too ... to が典型) が含ま

れているが(グリーンバウム・ワーク, 1995, p. 587), 本稿は as 節が関与するものを取り上げる。比較構文において両節で繰り返される情報は従節では省略, 代用などされることがよくある((29)の例では as her sister の後に is healthy が省略されている)。比較には, 「比較の対象」, 「比較の基準」, 「比較の基盤」(比較を成立させる基盤で, テキスト上よりもコンテキストで決定されることが多い)が必要で, (29)の例では, 比較の対象はジェインと妹, 比較の基準は健康, 比較の基盤はジェインに妹がいることである。この点に関して, 比較構文の前提としては, 比較の基準を示す語は基準を示しているのであって, 断定的に表現するものではない。例えば, (30)であれば, あくまでも年齢の比較をしているのであって, 必ずしも Ann が old である必要はなく, 赤ちゃんの年齢の人にも使える。このことは as が等価的に比較対象どうしを同等比較しているのであって, ここにはある程度の<看做し行為性>が関与している。例えば, (30)のように数量化が客観化しやすいものだけでなく, (31)のように, 価値判断を伴うものも多くある。従って, as の函数関係は「等価」に「看做す」という発話者の内的プロセスが深く関与すると言えよう。このことを押し進めると, as 節の出来事性が詳らかになる。

(29) Jane is as healthy as her sister.

(30) Ann is as old as Susan.

(31) He is as kind as his father.

(32) She works as hard as she ever did.

(33) John is as tall as any of his friends.

(34) John is as rich as anyone has ever been.

(32)の as 節は ever という表現からもわかるように, 非断定的である(グリーンバウム・ワーク, 1995, pp. 587-588)。これは (33) (34)においても当てはまる。(33)だと, as 節中, 非断定的に any という存在記号(existential quantifier)を使用して「任意の1つのメンバー」を想定して比較対象を提示している。以上から, 比較構文における as 節はオリゴ付近で<現実に生起している出来事>を指標するものではなく, 何らかの比較基準を提示するもの, つまり, やや抽象空間の出来事を指標するものである。したがって, ややもすると as という操作子が「比較」の意味性を前景化できない可能性もあるため, 副詞の as によって相関的に操作子 as と呼応させることで「比較」の意味合いをより鮮明に出すことが構文上, 可能になる。

(35) He studied hard, as does his sister.

(36) He studied as hard as his sister does.

ある辞典は (35) を「比較」の項目で例示しているが, これは前述のように「対比」とも「態様」とも考えられる。ところが, (36)であれば, 副詞 as によって比較の基準が, 結合子 as によって比較の対象が明示化されているために, 「比較」の意味合いが前景化される。これらのことに

鑑みると、本来 as 節は< 現実に生起している出来事 > を指標するものであるが、「比較」においては「看做し行為性」が強く、したがって抽象空間の出来事を表現する際に、比較性を前景化するために副詞 as で構文の統合性を強めていると思われる。これは逆に言うと、抽象的・象徴空間の事象を比較対象にして使っているうちに、その言説が連鎖的に伝播し、ついには言説が体制化・固定化することによって、却って副詞 as を伴わずとも類像的に当該表現が解釈者によって了解される、という時間的プロセスを経た表現もある。『ウィズダム』などは、as ... as 型の強意的直喩表現は固定した比喩表現で、最初の as が省略されることがある。(as) free as a bird (鳥のように自由で)、(as) hot as hell (地獄のように暑い)、(as) like as two peas in a pod (うり二つ) などがその例である。

以上のように「比較」を表す as 節では、オリゴからやや遠い事象を比較の対象として取り上げ、それを「等価」であると「看做す」操作が行われているのが、この語義の函数関係といえる。

⑥〔局面〕…するところでは、…する限りでは：

この「局面」というのは『E ゲイト』の項目の標題であるが、この語義を立てるに当たっては、語義の認定の考え方を今一度見つめなければならない。

「語義のゴミ箱」と化しがちな、いわばマイナーな語義に関しては、辞典により命名も様々である。まず、語義のインフレ抑制政策を打ち出している瀬戸の『多義ネットワーク』は上記語義のうち⑤を中心義としつつ①②④⑤のみを語義として立てている。ところが他の辞典は①～⑤をすべて語義として立てた上で、⑥の語義を「注釈」「限定」「範囲」「様相・見方」などの言葉で命名したり、標題をつけることなく語義解説を施したりしている。このような状況にあるため、当然他の語義との連続性の捉え方も様々で、当該語義に意味論的にも統語論的にも異なったものが盛り込まれている。ここでは接続詞「態様」の語義と関係代名詞的な「コメント節」との連続性がポイントになる。

ではここで、パラメーターのスコープと as 節内での統語的振る舞い方の違いによって、さらに分類をしておきましょう。

- (a) [ 名詞句 ]+as[ 節内に代名詞 ]：名詞句と代名詞が照応（限定）
- (b) [such/the same+ 名詞 ]+as[ 節内の代名詞が空所 ]：as が擬似関係詞の役割
- (c) [ 主節 ]-as[ 節内の代名詞が空所 ]：as が擬似関係詞の役割（コメント節）
- (d) [ 主節 ]-as[ 節内に代名詞 ]：主節と代名詞が照応（局面）
- (e) [ 主節 ]-as[+ 過去分詞 ]：as 節内で主格代名詞（+be 動詞）が省略

ここでパラメーターどうしの接続の仕方として、「+」で示したものは語順が義務的、「-」で示したものは as 節が文中移動可能なことを示す。以下、例文と上記分類の対応関係を示す（二重下線部と下線部がパラメーター、四角の囲みが照応する代名詞、φが空所の位置、をそれぞれ示す）。

- (37) Life as we know it would be impossible without water. (a)
- (38) He told me a lot about Kyoto as he know it [ it was ] ten years ago. (a)
- (39) This is the same bag as I lost  $\phi$ . (b)
- (40) We admitted as many men as  $\phi$  came. (b)
- (41) Suddenly the computer system stopped, as  $\phi$  happens sometimes. (c)
- (42) Is John really ill, as his friends seem to believe  $\phi$ ? (c)
- (43) As I understand it, I will be given one sick day per month along with one vacation day. I must use all of these days, by the end of my contract with your company. If I do not, I will forfeit these days since they cannot be paid out. (d)
- (44) Lack of information is the main problem, as I see it. (d)
- (45) As  $\phi$  mentioned yesterday, I just gave a public lecture about dark energy. (e)
- (46) As  $\phi$  was mentioned in Section 4, Chapter 2, the EU has steadily been moving toward economic integration among its member countries and is to enter the third phase of the Economic and Monetary Union (EMU) in 1999. (e)

以上を踏まえると、(a) は名詞句の「限定」として本項目に、(b) と (c) は関係詞の項目に、(d) と (e) は「局面」として本項目に位置づけることとする。統語的振る舞いに関しては統語論的次元の項で扱うこととし、ここでは意味の問題を扱いたい。言語類型論上それほど大々的に取り扱われている接続に関する語義であるが、いずれにしても「局面」「注釈」「限定」「範囲」「様相・見方」という標題には共通項がある。それは、パラメーターどうしを as で結合することにより、主節（の一部の名詞句）を as 節が枠付けしていることである。その際、意味操作としては＜等価性＞が背後にあり、as 節に後景性という特徴もあることから、as 節が主節（の一部の名詞句）をメタ言論（メタ語用論）的に枠付けしている。そして（主節の一部の）名詞句を枠付けする場合は as 節が名詞に関する枠付けであるのでメタ意味論的に、主節で語られている出来事を枠付けする場合には as 節が出来事に関する枠付けであるのでメタ語用論的に結合される。具体的に示すために上記の (a) と (c) を例に取ると、

- (47) a. The industry as we know it began in the 18th century. (a)  
 b. The industry, as we know, began in the 18th century. (c)

において、(47a) は the industry というモノの対象指示への枠付けであるので意味論上の操作をメタ・レベルで行っているのに対し、(47b) は the industry began in the 18th century という命題、つまり過去の出来事を指標してオリゴ空間で言語化することに対する枠付けであるので、そのメッセージ内容の状況をオリゴ空間で位置づける操作が働いているので語用論上の操作をメタ・レベルで行っている。このようにメタ操作が働くこの語義は、メタ操作の意味的曖昧性が

ら、他の語義との連続性においても曖昧である。例えば、

(48) On TV we can see events as they are happening all over the world.

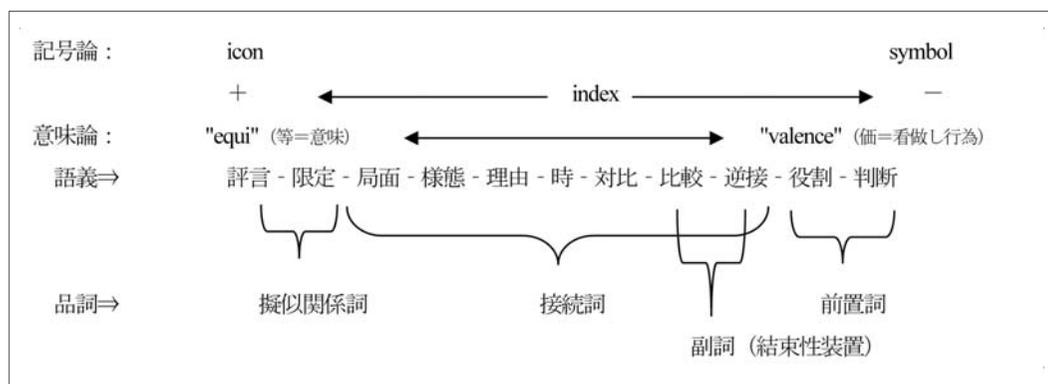
はある辞典では、上記分類の (a) として紹介されている用例であるが、「起きている時に」「起きているのと同時に」「起きているありさまで」「起きているままに」「起きているのと並行して」「起きている出来事」など、「時」「態様」「対比」「局面」と複数の語義との連続性が認められ、かつ、パラメーターとしても「局面」の語義と捉えると events のみが as 節と結合されていると解釈されるが、その他の語義と捉えると主節全体が as 節と結合されていると考えられ、曖昧である。以上をまとめると、この「限定」とか「局面」の語義はパラメーターどうしをメタ・レベルにおいてくゆるやかな等価性 > でもって結合することが特徴である。

#### 4. 結論

以上見てきたとおり、ここで引き出される結論は、as という結合子は函数関係を表示し、その関数の意味的操作は中心義などのプロトタイプからの認知操作（メタファー、メトニミー、シネクドキー）よりも、潜在的意味（meaning potential）としてのコアをベースにするほうが言語のメカニズムとして説明力があること、それぞれのパラメーターが指標する出来事（ないし指示対象）の概念領域によって as の意味性が決定されること、as 節が指標するカリブレーションの射程の違いが as の意味性に反映されること、パラメーターどうしのセンテンス内要素の違い（名詞句か節か）や as が使われる構文におけるパラメーターどうしの接続構造の違いによっても、カリブレーションの違いがおき（象徴的か指標的か類像的か）、それが as の意味性にも反映されること、である。

そして、as の結合子としての意味特性は、（指示対象を含む）出来事と出来事を「等価性」でゆるやかに結合する、というものであった。ここで as の等価性のグラデーションをまとめると、表2のようになる（ここでは他の品詞も含めて表にしている）。

表 2



接続詞の語義を概括すると、まず、「局面」には<名詞句-as-節>を取る「限定」と、<節-as-節>を取る「局面」があり、「限定」では as 節内に代名詞があり、それと名詞句とが照応関係にあるので、「相関的擬似関係節」と近似している。(擬似関係詞を含む)この用法はメタ言語性(メタ意味論的,メタ語用論的枠付け機能)がある。そして、「局面」「様態」「理由」「時」「対比」と進むにつれて、as の「等価性」(記号論的には類像性)から「等価的看做し行為性」(記号論的には象徴性)へとグラデーションが認められる(節-as-節)。これは主節が指標する出来事と as 節が指標する出来事の意味内容がどこまで類似しているか対立的か、ということの反映である。<類像から象徴へ>というグラデーションと<静的から動的へ>というグラデーションが呼応しており、その先にあるのが「逆接」「比較」である(節-as-節)。この両者は動的性格があるため、相関語である副詞 as によって結束性を確保することで「等価性」の意味特性を保持する、とまとめることができる。

#### 参考文献

- Brugman, C. (1988 [1981]). *The story of over: Polysemy, semantics and the structure of the lexicon*. New York: Garland Publishing Inc.
- 深谷昌弘・田中茂範(1996).『コトバの<意味づけ論>』紀伊国屋書店.
- 福村虎治郎(1985).「代名詞の有無と as の品詞」『英語教育』1985年5月号, 58-60頁;1985年7月号, 64-65頁.大修館.
- グリーンバウム, S.・クワーク, R. (1995).『現代英語文法 大学編』[新版](池上嘉彦・米山三明・西村義樹・松本曜・友澤宏隆・訳).紀伊国屋書店.[原著:Greenbaum, S. & Quirk, R. (1990). *A student's grammar of the English language*. London: Longman].
- 今井邦彦・中島平三(1983).『現代の英文法 第5巻 文(Ⅱ)』研究社.
- 石橋幸太郎ほか(編)(1984).『英語語法大辞典』大修館.
- 古賀恵介(1998).「Whenの意味論」『福岡大学人文論叢』30.3, 1639-1666頁.
- (1999).「Asの意味論」稲田俊明・水光雅則・大庭幸男・西村秀夫[編集]『言語研究の潮流』97-110頁.開拓社.
- 小西友七(1980).『英語のしくみがわかる基本動詞24』研究社.
- 国広哲弥(1997).『理想の国語辞典』大修館.
- Lakoff, G (1987). *Women, fire and dangerous things*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1987). *Foundations of cognitive grammar*, Vol. I. Stanford: Stanford University Press.
- 瀬戸賢一(2007b).「メタファーと多義語の記述」楠見孝(編)『メタファー研究の最前線』(31-61頁).ひつじ書房.
- 荘口美樹子(1993).「節を先行詞とする as 節について」『九大英文学』36: 67-83頁.
- 田中茂範(編著)(1987).『基本動詞の意味論: コアとプロトタイプ』三友社出版.
- (1990).『認知意味論—英語動詞の多義の構造』三友社出版.
- (1997).「空間表現の意味・機能」田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』1-123頁.研究社.

- 田中茂範・佐藤芳明 (2001) . 『英文法マラソン 文法 Q&A 80』 アルク .
- 田中彰一 (1997) . 「節内容を受ける as 節の伝達機能」 山中猛先生退官記念論文集編集委員会 『英語のこころ』 241-258 頁 . 英宝社 .
- (2001) . 「文内容を受ける as 節の構造と機能」 『意味と形のインターフェイス』 上巻 385-397 頁 . くらしお出版 .
- Taylor, J. (1989) . *Linguistic categorization: prototypes in linguistics theory*. Oxford : Oxford University Press.
- 飛田良文 (1998) . 「国語辞書における形容詞の意味記述」 『言語』 1998 年 3 月号, 64-70 頁 . 大修館 .
- 山中紀子 (1985-86) . 「文を先行詞とする as 節 (1) (2)」 『英語教育』 1985 年 12 月号, 71-73 頁 ; 1986 年 1 月号, 64-66 頁 . 大修館 .
- 吉村公宏 (2002) . 「プロトタイプ (prototype)」 辻幸夫 (編) 『認知言語学キーワード事典』 研究社 .

#### 参照辞典

- 井上永幸・赤野一郎 (編) (2006) . 『ウィズダム英和辞典』 三省堂 .
- 木原研三・宮井捷二・Davenport, P.E. (編) (2004) . 『グランドセンチュリー英和辞典』 三省堂 .
- 小西友七・南出康世 (編) (2006) . 『ジーニアス英和辞典』 大修館 .
- コリンズ編 (2001) . 『コウビルド英英辞典』 紀伊国屋書店 .
- 国広哲弥・堀内克明・安井稔 (編) (2006) . 『プログレッシブ英和辞典』 小学館 . (<http://www.yahoo.co.jp/>より 2007 年 3 月から 12 月にかけて情報取得) .
- ロングマン英和辞典編集委員会 (編) (2001) . 『ロングマン現代アメリカ英語辞典』 桐原書店 .
- 松田徳一郎 (編) (1994) . 『リーダーズ・プラス』 研究社 .
- 松田徳一郎・東信行・豊田昌倫・原英一 (編) (1999) . 『リーダーズ英和辞典』 研究社 .
- 中島文雄 (編) (1970) . 『岩波英和大辞典』 岩波書店 .
- 瀬戸賢一 (編) (2007a) . 『英語多義ネットワーク辞典』 小学館 .
- 小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会 (編) (1993) . 『ランダムハウス英和大辞典』 小学館 .
- 竹林滋・小島義郎・東信行 (編) (2001) . 『ルミナス英和辞典』 研究社 .
- 田中茂範・武田修一・川出才紀編 (2003) . 『E ゲイト英和辞典』 ベネッセコーポレーション .
- 山岸和夫・木原研三 (編) (2000) . 『新グローバル英和辞典』 三省堂 .